

“コラボレーション授業”の可能性をさぐる

「こたえの簡単に出せない問題を話し合う」

～ 新田暁高校と高崎健康福祉大学のコラボ授業 ～



「高大連携」（高校と大学の連携）が流行りである。おおかたは大学のえらい先生を高校が招いて講義や特別授業をしていただくというスタイルが多い。しかし、今回取り上げるのは「コラボレーション授業」、つまり両方の教師たちが対等の立場でともに創っていく授業である。県立新田暁高校の船橋聖一教諭と高崎健康福祉大学社会福祉学科のエイムズ唯子、戸澤由美恵、根岸洋人の各准教授が実践した授業を紹介したい。

2009年3月に始めたこの授業は、毎年テーマと方法を変えて実践し発展してきた。1年目は「認知症高齢者の理解と対応」「子ども虐待－親の理解と対応」、2年目は「無差別平等の原理を考えよう」、3年目は「障害者差別について考える…産む？産まない？おなかの中の障害児」。いずれも今日的なテーマで興味深いのが、紙面の都合で、私が参観した2011年3月4日の授業を中心に記述していきたい。

生徒は、社会福祉サービス系列2年生16名（男子2名・女子14名）。まずコラボ授業に先立って2月14日にプレ授業を実施。生徒はビデオを見る前にアンケートを記入し、その後ビデオ教材『青春リアル』・『アラームに囲まれた命』を視聴して、感想・意見を書いた。

コラボ授業のおおまかな流れ

<前半：3校時>

- (1) コラボ授業の進め方の説明と授業のねらいの提示

- (2) 教員・学生支援員の紹介（学生支援員は4グループに1人ずつ入る。学生支援員から社会福祉士実習での障害児や親との接点など体験・感想を聞く）

- (3) アイスブレイク（簡単なゲームで緊張をほぐす）

- (4) グループディスカッション

テーマA：障害児を育てるのは大変？何がどう大変なのか？その理由を考えてみましょう。

- (5) 発表（学生支援員が各グループの意見を集約・発表）

- (6) まとめ

<後半：4校時>

- (1) 後半導入（出生前診断の説明、プレ授業時のアンケート結果の提示、テーマの提示）

生徒のアンケート結果を提示（絶対産みたい7、どちらかといえば産みたい2、どちらともいえない6、どちらかといえば産みたくない1）。それを典型的な生徒の言葉として、4パターンのカードに分類して紹介した。

- (2) グループディスカッション

テーマB：障害児を産むことを迷うのはなぜだろう？その理由を考えてみましょう。

- (3) 発表

- (4) まとめにかえて（カードによる教員の意思表示とコメント）

- (5) アンケート（プレ授業と同じ項目）

この授業の目標は

- ① ビデオ教材を基に、障害児・者を取りまく問題について、自分の意見や感想が言える。
- ② クラスメートの感想や疑問、複数の教員の討論を聞いて、問題に向き合う姿勢を共有できる。
- ③ 障害をめぐるさまざまな葛藤から目をそらさずに、迷いながらも考え続けることの大切さを知る。

生徒が話し合いを楽しんでいる！

名調子がお得意の教師ならいざ知らず、多くの教師は、生徒が発言したり話し合ったりする授業をやってみたいものだと願っている。しかし現実には容易ではない。

ところが目の前の生徒たちは、活発に話し合い様々な意見を本音で出し合っていた。

「つきっきりで面倒みなきゃならないから、精神的にも大変だよ」「でも産みたい」「産んでみなきゃわからないよ」

「医療機器とかお金がかかるよね…」

「周りの目が…、どんな風に見られるか」

「子どもの将来の行く先、施設や学校などどうしたらいいか、悩むと思う」et c.

学生支援員の大きな役割

グループ内で司会・進行をしているのは学生支援員。生徒にしてみればちょっと年上のお兄さんだから、気軽に意見が出せるし、まとめや発表もしてくれるから安心だ。

もちろん、学生は事前学習をして臨んでいる。彼らがこの授業のカギを握っていた。

テーマの切実さとビデオ教材のちから

高校生にとってこのテーマは他人事ではない。ビデオ『青春リアル』では、若者が「産む・産まない」をめぐる本音の真摯な意見を出し合っていた。また『アラームに囲まれた命』は障害児の医療現場をドキュメントで

報道した。それらに触発されて、生徒は本気で考えていた。

生徒の本気さに触発され、参観していた先生が生徒に指名されて、自分の体験と意見を率直に述べた。初めて聞く先生の事情や意外な一面もあり、生徒は聞き入っていた。授業が創り出した新しい世界だった。

高校・大学教員の対等な関係

この授業を創るまでに、4人の教師は討論を重ね、緻密な授業案作成と任務分担をした。かなり白熱した議論もあり、大学教員の案に対して、船橋教諭から生徒の実態とそれに即した提案もしたという。

群馬高生研のゼミ（今年9月）でこの実践報告を聞いた澁谷正晴さん（高崎商業高校）は「うらやましいと感じました。…同じ教科の教員同士でもなかなか授業の内容について話し合う機会の持てない昨今。他の教科、他の学校種の教員が一つの授業をつくりあげようとするのが、いかに刺激的で意義あることかと考えました。そして、そのような授業がいかに生徒を揺さぶるかとも。」と感想を述べている。

この授業は差別を助長することになる？

気になっていることがある。なぜ、生徒から「どうして出生前診断なんかするんですか。私はやりたくない。」という意見が出なかったのだろう。多くの参観者の見守る中で1回きりのライブ授業、「周到に準備された台本で生徒が演じさせられた」感があつたのはやむをえないかもしれない。

この授業の後で、参観していた教諭の一人から「この授業は、差別を助長することになるのでは…。授業では正義（正解）を教えるべきです。」というような強い懸念が示された。

読者はどう思われるだろうか？

それほどに生徒も教師も揺さぶられる授業であつたと言えよう。（文責：瀧口典子）